

「発信力」を高める英語学習指導の在り方
－4技能を統合的・総合的に育成する年間指導計画の編成を通して－

星野 百合子 高久 由紀子 田村 岳充

平成20年3月に告示された中学校学習指導要領を受け、同9月に刊行された解説では、今回の指導要領改訂の経緯として、冒頭に、「知識基盤社会」の時代の到来とともに、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を述べている。

また、OECD(経済協力開発機構)のPISA調査など各種の調査結果を受け、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題があると言及している。

こうした背景を受け、平成20～22年度の3年間、本校外国語科(英語)では、「『発信力』を高める英語学習指導の在り方－4技能相互の活用を中心として－」をテーマに設定し、思考力・判断力・表現力を高め、4技能を統合的・総合的に育成するため、4技能相互の関連を意識し、既習の知識・技能を活用させ、発信力を高める学習活動の在り方について研究を進めてきた。

一方で、今年度から新学習指導要領に基づいた教育課程が全面実施となったことを受け、外国語科の改訂の趣旨、先行実施されている小学校外国語活動との接続や本校外国語科のこれまでの研究の成果を踏まえながら新しい指導計画を編成することが急務となっている。

1 研究テーマ設定の趣旨

1 本校の共同研究から

本校では、平成20年度からの3年間、共同研究テーマとして「新しい時代に対応した授業の在り方を考える－活用型学習活動の実践を通して－」を設定し、研究を進めてきた。学習指導要領の改訂に伴い、これまでの授業の在り方について再考し、知識・技能を「生きてはたらく知識・技能」へと高める学習活動の在り方について追究してきた。本校共同研究では、昨年度から新たな共同研究のテーマとして、「確かな学びを通して自己を確立する生徒の育成」を掲げ、自己と周囲との調和を図ることのできる、自己肯定感の高い生徒、また、よりよい集団・社会を築こうと、自ら考え判断し、行動(実践)できる生徒の育成を目指して研究を進めているところである。

自己と周囲との調和を図るには、コミュニケーションを行うことが不可欠である。これは、英語を通して、相手の意向を受け止め、理解するとともに、自分の考えや気持ちを伝える「発進力」の育成を目指す外国語科のねらいに通ずるものである。

コミュニケーションを通して相手を理解し、自分の考えや気持ちを伝えることで、人間関係はよりよいものになっていく。自分の存在や考え方が認められ、理解されることによって自己肯定感も自ずと高まることとなる。

しかし、時に、自分と相手の考えが一致せずに、コミュニケーションが中断したり、互いの関係が悪化したりすることもある。そうした場面で、互いの妥協点を見いだしたり、

関係を改善したりすることができるか、周囲からのアドバイスを参考に、自ら考え判断し、行動していくことが大切になる。

こうした背景から、外国語科（英語）では、前研究の成果を生かしながら、4技能を統合的・総合的に育成し、「発信力」を高めることができるようにするとともに、授業の中に、これまで以上に生徒自身が自ら考え判断する機会を設定し、擬似的な目的にとどまることなく、確固とした目的に向かって相手と意見を交流させ、互いに理解し合うことができるような活動を展開していく必要がある。

2 外国語科（英語）のこれまでの研究から

本校の外国語科（英語）では、これまでの研究において、生徒に言語の使用場面や働きを意識させ、自己表現を促す活動を数多く設定し、コミュニケーションの楽しさを実感させることに努めてきた。その中で、生徒に身に付けさせたいコミュニケーション能力を、次のように定義してきた。

コミュニケーション能力

- ア 「自分の考えや気持ち」を言語の使用場面と働きを意識して表現する能力
- イ 「相手の考えや意向」を受容し、対話する意味を見出すことができる能力
- ウ 基礎・基本を自分なりに活用し、コミュニケーションを図ろうとする態度

この定義を受け、平成 17～19 年度の3年間においては、イに焦点化し、「聞き手」の育成を志向した研究を行った。それ以前の研究の中でも継続的に行ってきた、場面や状況設定に工夫を凝らし、生徒が自分自身との関連を見出せるような意味のある英語のインプットを継続しつつ、聞き取れた内容をもとに、「話し手」に、より能動的に関わりをもとめようとするのできる生徒の技能の育成を図ってきた。

続く平成 20～22 年度の3年間の研究では、「聞き手」の育成を続けつつ、既習の知識や技能を活用しながら、「話し手」の技能を向上させることを目指した研究を行い、思考力・判断力の伸長とともに、生徒の「話し手」として技能が向上した。それを「発信力」と呼ぶこととし、以下のように定義した。

発信力

コミュニケーションを通して得た情報や知識を基にして、自らの意見や考えを相手に分かりやすく伝達することができる力

4技能を相互に関連させ、既習の知識や技能を活用させる学習活動を充実させることで、生徒の「発信力」を向上させることができた。

以上の2点から、本校外国語科（英語）では、平成 24 年度より新学習指導要領が全面実施になることに備え、これまでの研究の成果を盛り込み、4技能を統合的・総合的に育成しながら、生徒の思考力・判断力を高めつつ、3年間を通してより効果的に「発信力」を高めることのできる年間指導計画を編成することを目指すことにした。その結果、昨年度より、研究テーマを「『発信力』を高める英語学習指導の在り方 －4技能を統合的・総合的に育成する年間指導計画の編成を通して－」と設定し研究を進めることとし

した。発信力は相手の受信力を前提としている（受信力を見極められる必要）

2 研究計画

上記の趣旨をふまえ、以下のような研究計画を設定した。（年度は研究年度を示す）

1 第1年次（平成23年度）

- (1) これまでの研究の成果と課題並びに新指導要領の重点項目の確認
- (2) 外国語科（英語）の年間指導計画編成の基本方針の検討
- (3) 3年間を見通した発信力育成のための方策の検討
- (4) 研究の視点に基づいた授業の実践と事例の集積

2 第2年次（平成24年度）

- (1) 外国語科（英語）の年間指導計画編成の基本方針の確認と修正
- (2) 年間指導計画の編成と単元の指導計画・評価計画の作成
- (3) 研究の視点に基づいた授業の実践と事例の集積
- (4) 研究の評価方法についての検討

3 第3年次（平成25年度）

- (1) 年間指導計画に基づいた授業実践と指導計画・評価計画の修正
- (2) 研究のまとめ及び評価
- (3) 新研究の内容の検討

3 前年度までの研究内容

昨年度は、これまでの研究成果を踏まえ、年間指導計画を編成するための基本方針を検討するとともに、発信力の育成を志向した授業の実践を行った

1 研究の視点に基づいた授業実践について

昨年度の研究において、教師の観察やワークシートの評価例などから生徒の発信力並びにそれを支える思考力・判断力の伸長が観察されている。生徒の思考力・判断力の育成のためには、相手の発話のポイントをしっかりと聞きとったり、相手の考えや気持ちを受容的に理解し、それに応じて自分がどう感じ、どう考えたりすることが大切である。発信力の育成のための土台として、これまでの研究の成果が生きていることを改めて実感した。

また、発信力が伸びた最も大きな理由の一つと考えられるのが、英語学習における1年後、3年後の目標を年度当初に提示し、その目標に到達するために何が必要であるのか、生徒一人一人が自分を客観的に評価し、省察する場面を設定したことであろう。

詳しくは後述するが、自分の学習状況を文章で省察することで、生徒が自分自身をメタ的に見つめることができ、自分の英語学習における現在地点をしっかりと把握することができるようになったことが大きい。自分が理解していること、実際にできていることは何か。一方、自分が理解していないこと、改善すべきこと、これから行う必要のあることは何かをペアパートナーやクラスメート、教師の助けを借りながら明らかにすることで、学

習の広がり・深まりが見られるようになった。更に、教師が行った改善点を以下に挙げる。こうした工夫も、生徒の思考力・判断力・表現力の伸長に寄与していると言えよう。

- ア 各学年の授業を改善し、基礎・基本の習得に関する指導にさらに重点を置くとともに、それらを活用させる場面や方法等を工夫すること
- イ 教師と生徒、生徒相互が英語を通して考えや気持ちを交流させるインタラクションを授業の中に多く取り入れ、賛否や感想など話し手の意向を受けた上で、自分の意見を発言する流れが自然に継続するようにしたこと
- ウ コミュニケーション活動の導入部分を見直し、生徒の知的好奇心が刺激されるような魅力あるトピック選びに工夫を重ねたこと
- エ ペアや小グループでの対話活動や英作文を行う際には、伝えたいメッセージのポイントが受け手に伝わるように、誤りを必要以上に気にしすぎることなく活動が進められるように留意したこと
- オ アイコンタクトのような表面的な注意事項のみならず、教師も積極的に自己開示を行う等ユーモアを大切に、教師も含め、生徒が互いを受容的に受け入れ合える雰囲気作りを心がけたこと
- カ 聞いたり読んだりしたことをもとに、自分の意見や考えについて話したり、書いたりする活動を継続的に行うようにしたこと
- キ 自分の考えや気持ちを表現させる際には、誰に、何の目的で伝えるのか、発信する側と受信する側が相互につながり、関わられるような状況設定をするように努めたこと

2 年間指導計画編成の基本方針の確認

1年間の研究を通して検討した年間指導計画の編成の方針をまとめると、以下のようになる。まずは、本校外国語科（英語）で定義した「発信力」を育成することを目指し、生徒が思考・判断し、まとめた意見や考えを適切に表現できるようにすることが大切である。先に述べたように、1年後、もしくは3年後の目標とそれを体現する活動を示すとともに、リハーサルとして、各学期に発信力育成のための活動を位置付ける。

語彙や言語材料が習得されるまでには長い時間がかかるのは自明のことである。それらが一人一人の生徒にしっかりと身につくのを待ってから発信させるのでは、実際に自分の考えや気持ちを表現する機会が失われ、結果として生きて働く力を身につけることは難しくなる。こうした考えから、まずは学習したことを実際に使って表現する場面を各学期に位置付けることにした。年間指導計画には表れてはいないが、発信力育成のための活動を支え、実りあるものとするために、日々の授業において大切な豊富な英語のインプットを継続して与えることや、生徒が互いに聞き合うかかわりを形成できるような指導があることを確認しておきたい。

単元の終わりや、上記のような表現活動を終えた際に、自分の取り組みを省察させ、次の単元や、次の表現活動でよりよい成果を挙げるにはどうすればよいのか、また、自分が理解していないことやうまくできなかったことを自分自身で発見させることで、語彙や言語材料だけにとどまらず、表現の技能など、基礎的な知識や技能を着実に身につけることの大切さに気づかせることができるようにする。

このように、習得型の学習活動と活用型の学習活動とが相互に有機的に関連し合うよう留意しながら、年間指導計画の編成について検討を進めてきた。先に述べたように、発信力を育成するために効果を上げてきたこれまでの研究成果を年間計画の編成に反映させたい。

3 発信力育成のための具体的な方策及び外国語科（英語）における活用型学習と新学習指導要領の重点項目について

「発信力の身についた生徒の理想像」及び「発信力育成のための学年目標」を掲げ、活用型学習活動【ア 4技能が相互に活用された活動、イ 既習の複数の文構造を用いる活動、ウ 語彙・文法の使用・習得が反復的に図られる活動】を授業に取り入れてきた。更に、平成20年9月に刊行された学習指導要領外国語編の改訂のポイント（評価の観点、言語活動）に注目して、そこに挙げられている内容を整理し、本校外国語科（英語）の年間指導計画の編成に留意すべき点として活用することとした。

※第56回公開研究発表会 外国語科（英語）各論参照

4 小学校外国語活動との連携について

附属小学校との連携も進めてきた。附属小学校においては、昨年度より「慣れ親しんだ英語で、人とかかわることを楽しむ子どもの育成 ―インプットから意欲を高め、自己表出に生かしていく活動の展開―」という研究テーマを設定し、英語に触れる必然性を高めるため、楽しさを味わうストーリー性のある展開を工夫し、自然な流れの中で英語によるインプットを豊かにした授業を展開してきている。教師からのインプットを中心に、友人の話す英語にも耳を傾けてみよう、聞こえてきた英語の内容を理解しようとする意欲を高め、無理なく自然に自分の意見や気持ちを相手に伝えようとする児童を育成しようとしている。授業者が学級担任である利点を活用し、児童たちにとって旬な話題を取り上げたり、級友の好みを話題にしたりするなどして、相手のことを知りたい、自分のことを伝えたいという状況を作り出している。英語を媒介として人と人をつなぐ指導を大切にしている小学校の授業の在り方に、我々中学校教員も学ぶべきところが多く、今後も情報交換を継続していきたいと考えている。

4 本年度の研究内容

前年度の研究では、年間指導計画を編成するにあたり、引き続き活用型学習活動を位置づけた授業実践を行ない、前述のように効果的に生徒の発信力を育ててきた。日々の授業を行っていく中で、課題として挙げたこと（各プログラム間の言語材料のつながり、学期ごとの適切な課題の設定、3年間を見通した活動の流れ等）を年間指導計画にどう反映していくかを課題としながら授業実践を進めようと考えた。そこで、本年度は、あらたに ア ガイダンスの充実と省察の機会の設定 イ 小学校外国語活動との関連 エ 年間のゴールを意識した単元の指導計画・評価計画の編成 オ 総括的な評価のための評価規準の作成 を基本方針として加え、研究を進めた。

ア ガイダンスの充実と省察の機会の設定

1年後、もしくは3年後の指導目標とそれを体現する活動を事前に生徒に示すとともに、活動前に生徒が何を目標として活動を行うかを考えさせる機会を設定する。活動後には、自分の立てたねらいが達成できたかどうかを省察させる。

イ 小学校外国語活動との関連

1年生の導入期を中心に、小学校外国語活動を経験した生徒を対象とした授業を展開する際に留意すべき点を明らかにし、年間計画並びに授業の中に具現化する。特に、英語による意味のあるインプットを重視した授業作りを行う。

ウ 活用型学習活動の効果的な配置

- 語彙・文法の使用・習得が反復的に図られる活動を設定する。
- 既習の複数の言語材料を用いる活動を設定する。
- まとまった量をアウトプットさせる自己表現活動を設定する。
- 4技能が相互に活用された活動を設定する。

エ 年間のゴールを意識した単元の指導計画・評価計画の編成

1年後に到達させたい目標を意識した単元の指導計画・評価計画を編成する。実際に活用しやすい計画にするため、形成的な評価の流れを縦軸に配し、視覚的にも捉えやすいレイアウトとする。

オ 総括的な評価のための評価規準の作成

学期末、学年末に位置付けられた発信力育成のための活動を通して表出する生徒のパフォーマンスや作品を総括的にどのように評価するか、その具体が見えるような規準表を作成する。

1 研究の視点に基づいた授業実践例

本年度の授業実践については、上記の中から イ 小学校外国語活動との関連と ウ 活用型学習活動の効果的な配置、に焦点をあてて研究を進めた。授業の実践例を紹介しその具体的な内容について述べる。

1 学年

小学校で外国語活動を経験してきた生徒たちが、どのような授業を経験してきたのかを我々中学校の教師が把握するため、また、安心して中学校の授業に取り組むことができるよう、年度当初に小学校外国語活動に関するアンケートを実施した。アンケートには主に、①小学校で行った主な英語活動の内容、②どのようなことが英語で表現できるか、③中学校の英語の授業での楽しみなことと不安なこと等についての項目を設定した。①、②に関しては、新入生の英語学習に向けてのレディネスを明らかにすることにより、入門期の授業を計画する際に考慮すべきことを明らかにできると考えた。③に関しては、授業が本格的に始まる前に、アンケート結果を生徒たちと共有し、中学校での英語学習に向けた期待

感を高めたり、不安感を和らげたりすることができると思った。

ア アンケートの結果より

①については、ALT の先生と自己紹介、食べ物、スポーツ、動物、数字、色等の言い方、時刻天気の言い方、フルーツバスケット、ビンゴゲーム等のゲームということで、ほとんどの小学校で同様な活動をおこなってきたようである。②については、あいさつ、簡単な自己紹介、好きなこと・もの、①に挙げた言い方、質問の仕方等であるが、中学校高学年で習得するような言語材料を使用した経験を持つ生徒もいた。③に関しては、楽しみなこととして、小学校で習った英語が使えるようになること、英語が書けるようになること、日常的な話題を英語で話すこと等が挙げられ、不安なこととして、自分が話す英語が通じるか、単語が覚えられるか、文の構成が理解できるか、予習・復習が追いつくか、書くことができるか等が挙げられた。アンケートから、中学校の入門期に行っている内容と類似した活動を小学校で行ってきていることが分かった。また、出身小学校による差もほとんど認められなかった。小学校では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成が行われ、生徒たちは、他者と関わる基本的な姿勢を身に付けていると考えられるが、中学校においても引き続き意欲的に活動ができるよう、他者と関わる活動をたくさん取り入れることを考えた。

イ 授業を進める際の留意点

授業を進める際に留意したことは、小学校で体験してきたことをできるだけ活かしたり、振り返ったりする時間を取るということと、他者と関わる楽しさを共有できるような活動を多く取り入れるということである。前者に関しては、授業中に生徒に答えを予想させる場面を多く取り入れたり、自由な発想で表現できる場面を今まで以上に多く取り入れたりするなどを試みた。例としては、ピクチャーカードを通して内容の導入をする際、教師側から一定の情報を与える前に内容を予測させ、生徒がこれまで慣れ親しんできた単語等を使いながら解答させることを試みた。後者に関しては、対話活動において、自分の考えや気持ちを英語で伝え合ったり、新たな情報を付け加えたりする活動を多く取り入れることを心がけた。活動の後には、必ず全体で共有する場面を設け、他者のことをより詳しく知ることができるよう、発表の仕方や聞き方を工夫した。

ウ 授業の流れ

実践例 1

授業中に使用したワークシート① (PROGRAM1 の自己紹介の場面－抜粋)

- | | |
|---|--|
| 1 | 会話のマナー！これだけはおさえよう！ |
| ★ | 相手の目を見て話そう
eye contact(アイコンタクト)をとることはとても大切です。会話の基本だね！ |
| ★ | 表情豊かに、心をこめて、相手に聞き取れるように！
無表情で聞き取りにくくては、コミュニケーションは成り立ちません！ |

2 Let's introduce yourself to Mr.○○○ (○○○先生に自己紹介をしよう。)

こんにちは。○○○先生。私の名前は○○です。
○○と呼んでください。私は○○出身で、○○に住んでいます。どうぞよろしく。
お会いできてうれしいです。



3 Let's introduce yourself to your friends. (たくさんの友達と英語であいさつをしてみよう。)



こんにちは。私の名前は○○です。～と呼んでね。私は○○出身で、○○に住んでいます。会えてうれしいです。

活動の前に自己紹介の仕方を振り返らせると共に会話のマナーを確認し、また、相手に、より詳しく、分かりやすく伝わるようにするためにはどうしたらいいかを全体で共有する時間をとる。ここで生徒たちから挙がってきたことをまとめ、次の活動に活かすようにする。2の活動では、基本的な内容は示すものの、英語で表現できる情報は自由に表現できる雰囲気を作るよう配慮する。3の活動では、友人同士でそれぞれ表現できる範囲で自己紹介し合う。その後、再度全体で紹介させ合うことにより、いろんな表現方法があることを共有させる。

授業中に使用したワークシート② (PROGRAM7の導入、対話活動の場面一抜粋)

ロデオ会場にて

- ・由紀は誰と、どんなことについて話しているのかな？
- ・印象に残った単語、表現は？

※ 導入の場面では、教科書の「○○と●●のおしゃべりを聞いてみよう」というリスニング教材を利用し、どのようなことが話題になるのかをイメージさせる。その後、ピクチャーカードを見せ、知っている単語や表現等を使い内容を予想させる。生徒たちから出たものは、教師が分かりやすくまとめ、スムーズに内容に入れるように配慮する。

3 Talk about yourself in your group. (グループで話してみよう。)

2 Did you sleep well last night?

(1) Hold a dialog.

トピック→What time did you go to bed last night?



2nd question: How long did you sleep?



3rd question: Is that enough?

※ 1st stage free talk 2nd stage memo



「時間の長さ」を伝えられるようになることが目標の活動である。基本文の練習を十分に行った後、対話中に使われそうな表現を全体で共有してから活動に入る。対話形式は固定せず、生徒たちがある程度自由に表現できるようにした。また、“Is that enough?”と付け加えることにより、新たな情報をもとに対話の内容が広がるようにした。

エ 生徒の様子

小学校外国語活動を経験し、英語に触れる経験がこれまで以上に増えたことから、listening の力がこれまでの生徒に比べると高いように感じられる。英語独特の発音やリズムをとらえる感覚に優れている生徒も多い。ALT ともスムーズに対話活動に入れるなど、外国人とも臆せず関わろうとする態度が育っていることを感じた。授業中の対話活動の様子も、アイコンタクトを心がけたり、ジェスチャーを使って気持ちや様子を伝えようとしたりなど、態度面の積極さも感じた。

オ アンケート

教科書の PROGRAM の内容が終わった時点で、生徒達たちに中学校の授業に関するアンケートを行った。

- ① 小学校での英語活動で経験したことが、中学校で役に立ったと感じたことはありますか？あるとすれば、それはどのような場面ですか？
- ② 中学校の英語の授業で楽しいと感じる活動はどんな活動ですか？
- ③ 1年を通して、どんなことがあらたにできるようになりましたか？

①について

- ・あいさつや自己紹介の場面。
- ・「聞くこと」の活動は小学校に時もたくさんやってきたので、先生や ALT の先生が話していることがなんとなく理解できた。
- ・基本的なあいさつや単語を習っていたので、スタートダッシュがスムーズだった。
- ・聞いたことのある単語は、書くときも楽だった。

②について

- ・自己紹介。小学校のときよりもパワーアップした内容になった。
- ・ペアやグループでの対話活動やスキット作りの活動。実用的で楽しい。
- ・ALT との授業。
- ・英語を書く活動が楽しい。

③について

- ・基本的な言い方しか分からなかったが、その応用が分かるようになった。
- ・自分の気持ちや意志を英語で表現できるようになった。
- ・いろいろな英文が作れるようになり、会話の幅が広がった。
- ・単語を言うことから会話へと発展した。
- ・答えるだけでなく、質問することもできるようになった。
- ・英語での表現の幅が広がったので、“おもしろい”と感じることが多くなった。

カ アンケートの考察と今後の課題

アンケートの記述から、生徒が小学校で経験してきたことが、中学校入門期学習に影響を及ぼしていることが分かった。生徒の耳が、英語を聞くことにこれまでよりも慣れていることで、英語でのコミュニケーション活動に臆せず入れると感じている生徒が多い。また、小学校で慣れ親しんできたことを活用しながら、より発展的な表現活動を楽しんでいる生徒の姿も多く見受けられた。特にペアでの対話活動やスキット作りでは、小学校で習った単語を取り入れながら、新しい言語材料と組み合わせて表現するなどの工夫が見られた。

一方、アンケートの結果や授業中の観察から、英語に対する多少の苦手意識を持って中学校に入ってきた生徒がいることも確かである。小学校での活動の影響か、英語での表現活動に自信がない生徒や、小学校で取り組んでこなかった英語を書く、ということに対して不安がある生徒も見受けられる。今後は、そのような記述をした生徒にとっても、自信を持って英語で他者と関わっていけるように、授業の流れや学習形態に更に配慮をするとともに、英語学習に対して肯定感をもっている生徒たちが意欲的に英語で自己表現をしやすいように、身近で自分たちと関わりのある場面を設定する等、工夫を凝らしていきたい。また、毎時間の冒頭に、他者と関わり合いながら自己表現する活動を取り入れたい。生徒が、英語の楽しさだけでなく、お互いの新たな情報を知ったり、共有し合ったりする楽しさも感じられるようにしていきたい。

2 学年

スピーチを取り入れた指導展開 〈2年生・2学期末のスピーチ例〉

題材：「思い出の写真」を語ろう！

準備： 実物投影機・スクリーン

課題： 自分が持っている写真の中からこだわりの1枚を選び、その写真についての思い出を語る。写真については、何歳の、どの場面の写真でもよい。スピーチの中身には、必ず〈共通の内容項目〉を入れて話すこと。

指導展開

時	活動内容	指導上の留意点
第1時	■スピーチ原稿の構想及び作文	<ul style="list-style-type: none"> ・評価の観点と目指す姿についてのガイダンスを行う。自分が何を目指すのか、めあてを記入させる。 ・いつの写真を使ってもよいこととし、話したい気持ちが湧くような題材設定にする。
第2時	■下書き〈共通の内容項目〉 Q1 Who took this picture? Q2 How old were you then? Q3 What were you doing then? Q4 What do you think of the picture?	<ul style="list-style-type: none"> ・原稿の書き方は「序論・本論・結論」を意識させる。 ・共通の内容項目を必ずスピーチの中に入れることを条件とする。 ・机間指導をしながら既習の文を使えるように指導・助言する。

第3時	<p>■小グループワーク①（4人）</p> <p>①お互いの原稿を読み合い「感想・1 Question」を書く。</p> <p>②友達からのアドバイスをもとに原稿の再検討をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の原稿には、感想のみならず必ずその内容に対して質問をすることとする。 ・友達からの Question が原稿の再検討に活かせるようにする。
第4時	<p>■清書及びスピーチ練習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・机間指導をしながら必要に応じて適宜指導・助言をする。
第5時	<p>■小グループワーク②（4人）</p> <p>①グループでお互いのスピーチを聞き合い評価をする。</p> <p>※ 評価の観点 （ 声の大きさ / アイコンタクト / 速さ / 英語らしさ ）</p> <p>②改善点・アドバイスを言葉で伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的に自分を振り返ることができる機会として、友人との練習の時間を設ける。 ・評価の観点を4つに焦点化して再度確認させることで、ポイントを押さえた良いスピーチを創りあげようとする意識を高めさせる。 ・友人からの評価が、スピーチ練習に確実に反映されるよう意識させる。
第6時	<p>■発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・話し手は聞き手を意識して、聞き手は話し手を意識して楽しく発表会に臨ませる。
第7時	<p>■発表及び振り返り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第1時に記入させた自分のねらいを再度配布した上で、自分の準備・発表を振り返らせる。達成感とともに今後の課題にも目を向けさせ、学習意欲の向上につなげる。

<授業を終えて>

今回の年間指導計画編成にあたって、総括的な評価の場面を設けることとしたのは前述のとおりだが、スピーチに取り組む生徒達の活動や省察の様子を見取りながら、活動が非常に有効であったと感じている。以下、総括的な評価の場面を設けることの有効性について、また、指導過程に協同の場面（小グループ活動）を設けたことについて、その理由を述べる。

【学年末の最終ゴールに向けた、各学期末の発進力育成のための活動の有効性】

- ・生徒にとって、自己の成長の様子を振り返る絶好の機会となった（昨年と今年、1学期と2学期など、自分ができるようになったこと、まだ出来ないことなどを比較して感想を述べる生徒が多かった）。
- ・評価の観点を意識し、友人からのアドバイスを活かしながら練習する意欲的な姿が多く見られた。
- ・自分の発表のみならず、友達のスピーチを楽しく聞こうとする。（スピーチの題材は、選択の自由度を広くすると益々生徒のモチベーションが上がると思われる。）

以下、生徒の省察のコメントを紹介する。

(生徒感想 1)

練習で友だちに教えてもらったアイコンタクトやはっきり話すということに、気をつけられたと思いました。次回は、1つ1つの事について詳しく文章を作れたらいいと思います。自分の感情を出すということもできたらいいなとも思いました。

(生徒感想 2)

アイコンタクトは失敗しました。でも、写真について詳しく説明できたのでよかったです。練習時よりも聞きやすい速さでしゃべることができました。「旅行記」(1学期末のスピーチ)の時よりも英語っぽくできたのでよかったです。

【グループ活動の効用(原稿作り・スピーチ練習)】

- ・友人から感想・質問・アドバイス等を受ける機会を設けることにより、発表の質的向上はもとより、聞き手をより意識した原稿の練り直しができる。
- ・スピーチ練習では、聞き手が4つの観点に基づいて評価をし、結果を話し手にフィードバックするので、自己評価のみならず、客観的に自分の発表を見直すことができる。
- ・各自が共通の評価観点を持つことで、互いの評価がし易く、また、スピーチの表現力を高めるポイントが焦点化されるので練習に取り組み易い。
- ・聞き手を意識した発表を、本番(全体発表)の前に何度も練習することになり、発表に向けた自信を高めることにつながる。
- ・友人と練習し合う活動を繰り返し取り入れることで、友人の良い所を参考にしたり、自分に合った形で吸収したりすることができる。加えて、繰り返しリハーサルができることから、表現の技能のみならず意欲の向上がみられた。

<スピーチの題材設定について工夫した点>

2年生においては、1学期末には「旅行記」、2学期には「思い出の写真」を題材にスピーチを行った。「旅行記」については、遠足や修学旅行などの全員が同じ旅行を対象に書くのではなく、部活動のメンバーと、幼なじみと、親戚や家族との旅行など、今までに経験した様々な旅行の中から、一番思い出深いものを選んで良いこととした。

また、「思い出の写真」でも、写真選び1学期と同様に、何歳の、どの場面のものを使っても良いとした。自分が赤ちゃんだった時の写真、部活動の試合での得点シーン、小学校時代の学芸発表会等、実にバラエティに富んだ写真が飛び出した。

スピーチの題材は、その選択の自由度を広げると、生徒のモチベーションが更に高まると思われる。また、写真を実物投影機に映し出し、SHOW&TELLの形をとったスピーチでは、話す方にも聞く方にも楽しく、盛り上がるものとなる。

<今後に向けて>

今後は、こうしたパフォーマンスや作品をどのように評価するか、生徒の実態と我々教師の目指す生徒像との双方を考え合わせながら、今回設定した評価規準の微調整を続け、より精度の高いものとしていきたい。外国語科(英語)全員が、1年間、さらには3年間

の到達目標を共有し、指導に当たっていけるような密接な連携をしていくことが今後更に大切になっていくと感じている。

2 年間指導計画の編成について

本年度あらたに考えた基本方針を念頭に置き、3年間の全体計画、単元の指導計画・評価計画および総括的な評価のための評価規準を作成した。全体計画では、3年生の学年末に行う自己表現活動での生徒のパフォーマンスの様子を具体的にイメージし、それに向かって、各学年の適切な時期にも、自己表現活動をスパイラルに配置した。1、2年生で経験する活動が、3年生の学年末に向けたリハーサルとしての意味を持つことになるので、活動後の振り返りと、その後の自己の学習への指針となるような工夫も忘れずに行っていきたい。

全体計画を受け、形成的な評価をしながら生徒の学びを充実させていけるような単元の計画を立て、単元ごとに評価規準も作成した。それらについても、上で述べた自己表現活動に有機的に結び付くよう検討を加えている。なお、各計画については当日配布資料を参照されたい。

5 成果と今後の課題

研究の2年次である本年度は、前年度検討した年間指導計画編成のためのグランドデザインをもとに、4で挙げたように基本方針に修正を加え、年間指導計画を作成することができた。各学年末に、生徒がどのような知識や技能を身に付け、どのようなパフォーマンスができるようになっていくことが理想なのか、教科内で具体的なイメージを共有しながら編成することができた。また、小学校外国語活動との関連を踏まえ、意味のある豊富なインプットを大切にしつつ、生徒にとって無理のないように指導過程を工夫しながら、自分の考えや気持ちを発信させることが、どの教室でも志向されるようになってきた。

授業実践に関しては、前年度までの研究の成果を引き続きながら改訂を加え、「発信力」育成のためのアウトプット活動を効果的に位置付けることができた。題材設定や活動形態にも工夫を凝らした結果、相手を意識しながら自分の考えや気持ちを伝え合ったり、互いの存在を認め合い、協調し合ったりしながら活動を進めていくことができるようになった。その結果、自信を持って自己表現をすることができるようになった様子が多く観察できた。このことは、本校共同研究のテーマ「確かな学びを通して自己を確立する生徒の育成」や、育てたい生徒像である「自己と周囲との調和を図ることのできる、自己肯定感の高い生徒・よりよい集団・社会を築こうと、自ら考え判断し、行動(実践)できる生徒」に通じるものであると言えよう。

また、小学校外国語活動との関連では、1年生の年度当初に行ったアンケートの集計結果を、コミュニケーション活動に反映させながら授業を実践することができた。小学校から生徒が経験してきた、音声を中心としたコミュニケーション活動を継続しながらも、今までよりも早い時期に文字を提示し、音声と文字との関連を意識させたり、英語によるインプットを大切にしながら、より多くの表現方法に触れさせる機会を持たせたりすることもできた。

今後の課題としては、年間指導計画を実際に運用し、微調整を行いながらよりよいもの

に改善していくことであろう。そのためにも、教科部会を適宜行い、意見交換を行いながら、並行して年間指導計画の修正を進めていきたい。また、生徒の発信力の伸長について適切に評価・分析できるよう、活動の成果を蓄積していく必要があると考えられる。本研究の最終年度に向けて、今後も、発信力育成のためのより効果的な手立てを講じていくと共に、研究の評価についても検討を重ねていきたい。

【引用・参考文献】

- 文部省(1998) 『中学校学習指導要領』解説 外国語編 東京書籍
- 文部科学省(2003) 『英語が使える日本人』育成のための行動計画の編成について
- 中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「外国語科の現状と課題, 改善の方向性」
- 中央教育審議会外国語専門部会(2007) 「専門部会第17回における主な意見」
- 中央教育審議会(2008) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領
- 国立教育政策研究所(2011) 『中学校編「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料」外国語編』
- 国立教育政策研究所(2011) 『「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料」の活用方法について』
- 宇都宮大学教育学部附属中学校
- (1997) 研究開発実施報告書
- (2004) 第49回公開研究会発表要項
- (2007) 第52回公開研究会発表要項
- (2008) 第53回公開研究会発表要項
- (2010) 第55回公開研究会発表要項
- (2011) 第56回公開研究会発表要項
- 伊東治巳(1999) 『コミュニケーションのための4技能の指導』 教育出版
- 伊東治巳(2008) 『アウトプット重視の英語授業』 教育出版
- 田村岳充(2008) 『聞く・話す・読む・書く4技能を高める! コミュニカティブ・ワーク37』 明治図書
- 和泉伸一(2009) 『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育』 大修館書店
- 田中武夫(2009) 『英語教師のための発問テクニックー英語授業を活性化するリーディング指導』 大修館書店
- 太田 洋(2008) 『英語を教える50のポイント』 光村図書
- 文部科学省(2008) 「中学校学習指導要領解説 外国語編」
- 平田和人編(2008) 『中学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書
- 肥沼則明(2011) 「指導と評価を一体化した授業づくりー中学校外国語科ー」
指導と評価4月号 図書文化